

---

# 旅をする真面目君

百花繚乱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅をする真面目君

### 【コード】

N9376Q

### 【作者名】

百花繚乱

### 【あらすじ】

旅をする真面目君…

旅の途中で闘技場の責任者になったり前世の能力を思い出したり…  
この青年がどのような乱世を切り開くのか!?

タイトル変更しました

旅人彪里（前書き）

初めまして百花繚乱です。

更新は遅めです。

## 旅人彪里

ここはある城の中…

ある一室には劉備、真名を桃香と名乗る少女と天の御遣いと呼ばれる青年、北郷一刀がいた…

一刀「ふゝ…政務も一段落って所かな？」

机の上に筆を置き、背伸びする一刀

桃香「うん、でもまだまだ山のようにあるね…」

桃香が苦笑いしながら答える…

朱里「お二人がいつもサボっているから後が大変なんですよ?」

一刀「う”っ…でも息抜き位しないと…なあ?」

桃香「うん、それに今は愛紗ちゃんいないし…それなら少し位は…」

『へえ…関羽さんが居なければサボっていたんですね?』

一刀「うげっ!?!この声は…」

桃香「ア、ハハハ…」

二人の背後に立つ青年…

その名は…

『全く…姉さんがいるから少しはマシだと思っていたんですがね…  
？お二人にはキツイお仕置きが必要ですね。』

朱里「はわっ！？ひゅひゅ、  
彪里君！？ヒョウリごめんなしやい！！  
！」

名を諸葛均…

史実の諸葛亮の弟である。

.

## 第一話（前書き）

遅くなりました…

まあ過去編みたいな感じですよ。

## 第一話

僕は諸葛均

字は子魚

真名は彪里

現在劉備様と御遣い様は董卓討伐の勅命を受け、参加するかしないかを決めていきます…

と言うか政務の途中にそんな大事か事を気軽に話さないで下さい。

しかし董卓ですか…彼女が悪政を行うとも思えないのですが…

僕は劉備様の理想を叶えるべく仕官した諸葛亮孔明の従弟となります。

まあ僕は元々旅をしていた訳なんですけど…

その時、洛陽は何度か行きましたが…

とても悪政を行っているとは思えない賑わいでした。

どうやらこの戦…

裏がありそうですね…

その前に昔の話をさせて頂きます。

僕は15で既に人を…賊を殺しました…

初めて人を殺したのは、僕の村が賊に襲われ、賊が僕に襲いかかる時でした…

〈回想〉

燃え盛る村の中心…

黒煙が立ち上る中…彪里は絶望していた…

『何でこんな山奥に賊が…っ！？父さん！！母さん！！』

彪里は自分の家にまっすぐに走った…

周りは火の海…

村人の死体で埋め尽くされていた…

『そんな…』

彪里の家の前には自分の両親が変わり果てた姿で倒れていた…

『父さん…母さん…』

彪里は自分の両親に近づく…

『……………』

彪里は父親が大事に持っている両剣を手にした…

母親からは首飾りを取り、自分の首に付けた…

『見ていて下さい…父さん…母さん…敵はとります…！』

彪里は両剣を片手に賊のいる方に走っていった…

村の中央には賊の集団がいた…

そこの頭が馬に乗り、声を出す。

頭「野郎共！！生き残りを探して殺せえ！！！！誰一人生きてかえす  
なあ！！！！」

オオオオオオ！！！！！！

賊が剣を片手に盛り上がる…

そこに一人の少年が歩いて来た…

頭「うん？何だあの餓鬼は…？」

賊の一人はその少年に向かって行き、剣を振り上げる…

賊「生き残りは殺さないとな！！」

剣が少年に当たる瞬間…

ドシヤ…！！

賊の身体が半分に切れた…

『お前達がこの村を…父さんを…母さんを…』

少年が両剣を持って賊に走って行った…

頭SIDE

この村からは食料と金目の物を全て奪い、後は生き残りを出さない用に狩りに行くつもりだった…

そこに一人の餓鬼が俺達に向かって歩いて来た…

仲間の一人が狩りに行ったから問題無いと思いニヤけていた…

だが…

ドジャァー!!

仲間の一人がいきなり縦に半分に分れた…

いや、斬られたんだ  
・・・

人間を縦に斬るのは、かなりの力が必要だ…

それをあの餓鬼は…!!

頭「野郎共!! かけえ!!」

こっちは200人はいるんだ!!

一斉かければ問題無え筈!!

SIDE終了

彪里SIDE

賊を一人斬った…

奴らの頭らしき奴が号令をかけた…

僕を殺す号令を…

ですが…

貴方達は後悔する…

僕を怒らせた事に…

SIDE終了

『虎牙破斬!!』

ザシユ!!

ザンツ!!

敵を切り上げた後に追撃に振り下ろす…

『ハッ!! ヤア!! セエイヤア!!!!』

ザンツ!!

賊「うぎあああ!!!!」

賊を一人…また一人斬っていく…

そして一刻がたつ位には…

頭「ひ、ひい!？」

そこには頭と彪里しか立っていないかった…

『さて…僕は貴方に言いました…僕を怒らせた事を後悔するんだな  
と…後悔しましたか?』

頭「ひっ！…た、助けてくれえ！！！！？」

賊は彪里によつて頭だけになつた…

『僕の村人…いや、今まで襲つた人達がそう行つた時…貴方は助けてましたか？』

頭「も、勿論だ！！だから殺さないで…」

ズンツ！！

彪里の刃が賊の頭を貫いた…

ドシヤ

『そんな濁りきった目で信じると思いましたが？まあ、例えそうでも殺しましたが…』

賊を殺した彪里は村に戻り、村人達を弔った…

『…僕が強くなって…この世界から僕みたいな人間を出さないようにする！！それが僕の罪…罪は償うさ…命をかけて…一生。』

彪里SIDE

それから僕は各地を転々として村人からの依頼で賊を狩ったり、山で拾ったキノコを売ったりした（毒キノコは薬屋で売れた…どうするんでしょうか…）

今回は山で熊が暴れているのでどうにかして欲しいと依頼を受けた…

普通の一般人ならどうにも出来ませんよ！？この依頼！？

山に入り、小さい山小屋があったので入ろうとしたのですが…

何処にでも…屑はいるんですね…

荀イクSIDE

クツ、村に帰る前に山小屋で荷物を纏めてる時にねられるなんて…

荀イク「離しなさいよ！？変態！！全身精液男！！男なんて皆そつよ！？」

賊A「うるせえなあ…」

賊B「さっさとその服、ひんむいちまえよ。」

賊C「なら俺が…」

ビリイツ!!

荀イク「キヤア!? 嫌っ!? 離しなさいよ!」

こんな所でこんなゲスに汚されるの…? ?

いや…

いやあ…

苟イク「嫌あああああ！…！！！」

パンツ！！

その時、入口の扉が勢い良く開いた…

SIDE 終了

一人の少女が犯されそうになる…

『救いようのないゲスですね。』

賊A「ああ？誰だテメ…」

その瞬間…

ブシュウイイ

賊の首が永遠の別れを告げた…

賊B「なっ!?!」

賊C「テメエ…何しやがる!?!」

ザシユ!!

ザンツ!!

『そして滑稽ですね…仲間が殺されたのに悠長に話すとは…』

ドシャ…

賊二人は共に崩れた…

『大丈夫…ではなさそうですね…？』

荀イク「……………（ガタガタガタ）」

少女…荀イクはまた襲われるのでは無いかと自分の体を抱き、震える…

ふたあ…

荀イク「…えっ？」

彪里は着ていた上着を荀イクに被せる…

『すみません…目のやり場に困ったもので…とりあえず貴女を村まで送ります。』

荀イク「……………」

『どうしました？』

荀イク「男でも…あんたみたいな奴もいるのね…」

荀イクはそっぽを向きながら答える…

『ああいうゲスが、男の評価を下げる元になるのは御免ですが、仕方ありませんね…とにかく貴女を村まで送ります。とりあえずその上着を着ていて下さい。』

荀イク「わかったわ。…礼を言わせて貰うわ…ありがとう。」

『どうぞ致しまして。』

彪里は荀イクを近くの村まで送るのであった…



## 第二話（前書き）

第二話です。

それではどうぞ。

## 第二話

少女を…荀イクさんを村に送り、荀イクさんが着替えた後、上着を返された…勿論洗ってだ…

桂花「あなたに真名を授けるわ。私は桂花、礼の代わりに受け取りなさい。」

『そんな簡単に真名を授けるもんじゃないですよ？』

彪里が軽く断りを入れる…

桂花「私が良いって言ったら良いのよ！…！」

『…まあ良いでしょう。呼ぶかどうかは僕が決めます。僕は彪里、

そう呼んで下さい。』

桂花「そう…あなたには世話になったわね。私はこれから袁紹の元に仕官しに行くけどあなた…彪里はどうするのよ？」

桂花が彪里を見る…

『僕はまだ修行の途中ですので…それに僕は誰かの下につく気は今はありませんので。』

桂花「そうなの…ならここでお別れね。」

『ええ、道中お気をつけて。』

彪里がからかうように言っ…

桂花「今までであんたが1番ましな男だったわ…それじゃあ。」

そう言い桂花は村から出て行った…

彪里SIDE

荀イクさんを見送った後山に戻った…

勿論依頼をこなす為だ…

『暴れている熊をどうにかする…ですか。』

因みにこの山、山賊がいるから熊が暴れたのでは？

…まずは熊ですね…

約10分後…

『これが暴れている熊ですか…随分と小さいな…』

見た目は大型の犬位で全身黒…コイツが…？いや、子熊か？

その子熊が近づいて来たので武器を構えるが…

グア

一鳴きして奥に行く…

付いて来いと言っているのか？

子熊に付いて行き、付いた場所が山賊の拠点らしき洞穴だった…

グルルル…

『？何だ？』

子熊が山賊達にむかって怒っている…のか？

『つまり奴らを狩れと？』

ガフツ！

コクン…と首を振る…

フム…

『まあ、山賊の討伐依頼もありましたからついでにやるとしまじょうか…』

そう言って両剣を構える…だが…

ワーワー…

『随分、中は騒がしいですね…宴会とかの騒がしさではありませんせんが…』

とところどころ黒髪の賊狩りやら何やら聴こえる…

噂に名高い賊狩りの人がいるんですか…？

入り口入って直ぐに賊の死体が転がっていた…

間違い無いですね…

「僕以外に誰かいます。加勢しますか…」

洞窟内に走り込む…

大分走って奥についた

洞窟内は中々広いですね…

っ！！

賊が誰かと戦っていますね。

しかし中々の腕ですね…

あれは女性…しかも一人ですか…

黒髪…噂の人と同じですね…

『よし、なら加勢する…！いきますよ…！』

愛紗SIDE

村人からの願いで賊退治に来たが…

愛紗「流石に多すぎじゃないか？」

と言いつつ賊を斬り伏せる…

賊「クソッ！！なんてアマだ！！」

ザシュ！！

愛紗「私はアマではない。関羽だ!」

賊はまだ奥にもいるか…

ギヤアアア

賊の断末魔を聞きながら奥に突き進む…

しかし…

愛紗「どっから湧いてくるのだ!?! 貴様等は!」

賊「へっへっへっへっへ…こんな洞窟で出入口が一つの訳ないだろ？」

成る程…脱出用の場所もあるわけか…

賊「だが頭はアンタを欲しがっていてね…黒髪 of 山賊狩りが女と知ってアンタを欲しがっているよ…最近ここにいる女に飽きたんだと…」

愛紗「っ…ゲスめ…」

賊「アンタは良い身体してるからなあ…一ヶ月は持ちそうだな!!」

そう言って私に襲いかかる賊共…

ザシユ！！

ザンツ！！

愛紗「生憎だが…私は貴様等々ときには屈しない。」

私は更に奥に進む…

そこで広場みたいな場所についた

愛紗「何だここは？」

私<sup>が</sup>来る前に宴会でもしていた後だな…

慌てて逃げたか？

だが…

ドスッ

愛紗「ぐあ！！？…矢っ！？」

私の右腕に矢が突き刺さっていた…

SIDE 終了

彪里SIDE

子熊の案内の元、洞窟内に侵入した僕は奥から聴こえる声を頼りに洞窟内を歩いていた…

『こつちには賊が余りいない…』

因みにまだ彪里は3人しか賊と戦っていない…

しかしさっきから襲ってくる賊は何か騒がしいな…

何か「黒髪の女だー!!」とか「探して犯しちまえ!!」とか「全速前進だー!!」とか…

最後に至ってはなんなんでしょう…

そつこつしているうちに奥から声が聴こえてきた…

黒髪の女性…



愛紗「ぐうっ!」

頭「へへへ…調子に乗るからそうなるんだよ。野郎共出てい!」

ぞろぞろ…

愛紗「クソッ!」

約数百人は軽くいる賊が頭の後ろの入り口から出てきた…

頭「ヒヒ、大人しくしてりゃ生かしてやるぜえ? まあ一ヶ月は姓奴隷だかなヒャーッハハハハ!」

愛紗「ぐ…この、関雲長をナメるなあああ…!!」

左腕だけで青龍偃月刀を振る関羽…

愛紗「ぐあつ!!」

賊に取り押さえられた…

頭「クククツ…年貢の納め時って奴だな…」

愛紗「クソ!!私は…（ここで死ぬのか…）」

関羽が諦めかけた瞬間…

チャキ

『全くその通りですね。』

一人の青年が頭の首に刃を当てていた…

頭「なっ！？てめ…」

『動くな！！首が無くなりますよっ。』

頭「ヒイ!!!？」

頭は顔を青ざめて大人しくなる…

『貴方が最近騒がしい山賊ですか？』

頭「ぐっ…：…そうだ」

『そうですか…：…ならこの場で決めなさい、ここで死ぬか…：…役人に突き出されるかを…：…』

頭「死にたくはねえ…：…チツ、役人にでも何でも突き出しやがれ!!!」

頭は観念したようだ

頭を縄で縛り…

『ではその女性を離しなさい、今すぐに…!』

賊「ヒ、ヒイイイイ…!!?!」

賊共は逃げ出した…

だが…

『誰が逃げて良いと言いました？』

ザシユ！！

賊「ギヤアアア！！！！？」

彪里が素早く賊から先回りして賊を斬り伏せる…

五分もしない内に賊が殲滅された…

『貴女は…黒髪の山賊狩りですか。』

愛紗「ハッ、ご助力感謝します。私は関羽、字は雲長です。貴方は官軍の方でしょうか？」

「そんな大層な者じゃありませんよ。僕は彪里、旅人です。」

ここに、後の五虎大將軍と呼ばれる関羽と一人の青年、彪里の初めての対面だった…

## 第二話（後書き）

完璧このへんはオリジナルですね…

とりあえず原作開始までにある程度の人とコンタクトを取らせたい  
ですね…（笑）

## 第三話（前書き）

更新遅い…

どうやったたら早くなるのかなぁ…

## 第三話

その後、賊は村の役人に突きだした。

謝礼金を結構貰った…

愛紗「彪里殿は一人で旅を？」

『そうですね。こつやって町や村で依頼をこなしながら旅しています…おっと、熊退治の依頼を忘れていました。』

愛紗「く、熊ですか…？」

愛紗は驚きながら聞く…

『ええ…つと、言っても子熊位しか居ませんでしたか…』

愛紗「子熊…そう言えば賊の隠れ家に熊の毛見たいな物が大量にあった場所がありました…もしかして。」

『…成る程、と言う事はあの子熊の親が賊に殺されたからその敵討ちを僕に頼んだ訳ですか…』

愛紗「頼まれたって…子熊にですか？」

『まあ、そんな所ですね…さて、僕はそろそろこの村を出ます。』

愛紗「もう行ってしまつのですか？私はまだ貴方にお礼が出来ていません…」

軽く俯きながら答える愛紗…

『気にしなくて良いですよ。僕があの方に時々、居ただけなんですから。』

愛紗「ですが！？…では私の真名を授けます。」

『簡単に真名を…』

愛紗「これだけは譲れません！！次に会った時に改めてお礼をさせて貰います。その証見たいなものです。」

『…頑固ですね…分かりました。真名は預からせて頂きます。です

が、呼ぶかどうかは僕が決めてからです。今はまだ関羽殿と…そう呼ばせて頂きます。』

愛紗「貴方も相当頑固ですね…私の真名は愛紗。ではまた会いましょう、彪里殿。」

『はい、また…』

こうして彪里は一人旅立ったのである…

彪里SIDE

関羽…

彼女の武はまだ未完成の型ですが…

なかなかどうして。

将来が楽しみですよ…

『と、まあ現実逃避はこれくらいにしましょうか。』

賊「身ぐるみ置いていけば命だけは取らねえよ。」

もう決まり文句ですね…

賊の台詞に溜め息つきたいです…

『そう言って実際に身ぐるみ置いて行った人は何人程いました？』

挑発とは言いづらいですが返しておく…

賊「え？いや、ちょっと待て…えっと何人だったかな…」

いやいや、真面目に考えても…

良く良く考えたらこの人、賊にしては剣が汚れていないですね…

それに一人だし…

賊「わり、思い出せないわ。」

『ああそうですか…実際に襲ったのは僕が初めてでしょうか？』

我ながら阿呆みたいな質問ですが…

こういう人間には…

賊「おう初めてだ!！」

ドドーン!!

何故かそんな効果音が聞こえてきました…

馬鹿馬鹿しい…

『なぜ僕を襲うのか、一人で賊きどりも気になりますが、貴方は人を…殺しましたか?』

賊「あ?殺す訳ないだろ?んな事したら役人に取っ捕まるし、人は殺したらダメだって母ちゃんに習わなかったのか?」

『何で賊紛いの事をしているのにそこだけ常識気取りなんですか!』

？  
』

賊「バツカおま、俺だつてお偉いさんに娘取られてなかつたらんな事しねえよ！！…つってもあんた相手じゃ俺あ勝てないな…」

自分の力量と相手との力量差が分かる人が…

『なら、何故そのお偉いさんにその矛先を向けないんですか？娘さんが人質にされた理由も気になりますか？』

賊「金が払えねえからだよ…そんで金があれば娘も解放するって言つててな…それで賊気取りをしてたんだが…つっても俺の性格じゃ無理かもしれんがな…」

そりゃ無理でしょうね…

そんなに馬鹿正直なら…

賊「それにあいつらには逆らえない…あいつらの後ろ楯に闘技場の番人が居やがるから…」

『闘技場？番人？』

聞いた事ありませんね…

賊「この大陸の真ん中に位置する場所にあるんだ…」

『ふむ…これも何かの縁、その闘技場の場所はわかりますか？』

賊「ちょい待ち、アンタ行く気か!？」

『ええ、こんな御時世ですが、貴方のような人が賊になり、更にこの世は混沌になりつつあります。』

賊「む、まあ確かにな…」

『そのお偉いさんが後ろ楯にしている番人も気になります。事と次第によつては僕が斬ります！！』

賊「…あんだ…一体何者何だ？」

『僕は彪里、ただの旅人です。』

僕の決まり文句も人の事言えませんね…

呂范「そうか…俺は呂范。なら彪里さん…闘技場は大陸から自分の武に自信がある奴が集まる場所だ…その中で番人が一番上…つまり

一番強い奴だ…あんたはそいつを斬るのか？」

『ええ、僕自身その闘技場に興味がありません…呂范さん連れて行って下さい。』

一時的に呂范が仲間になった

馬に乗って半刻…

『これが闘技場…でかい！！』

呂范「まあ、大陸から人が集まるからな…観客にしる武人にしる…」

『なら早速行きます。あなたはいざと言う時に脱出の準備だけはしていて下さい…僕はここの番人を潰します。』

呂范「わかった…彪里さん、頼んだ。」

そう言って呂范さんは闘技場の入り口から出ていく…

『では…腐った役人に加担する腐った番人を掃除しますか…』

闘技場の上層部は焦っていた…

「何故こんな強い奴が参加している!？」

「この作戦なら番人を使うまでもなく、終わらせて金だけ儲ける作戦なんだぞ!？」

「しかし、ここまできたら番人をだすしかない…いくらこの挑戦者が強くても番人には勝てまい…」

「挑戦者は彪里に趙雲か…まあまずはこの二人に潰し合って貰うか…」

彪里SIDE

…弱すぎる

何ですかこの手応えのなさは…？

いくら何でも酷すぎる…これじゃ番人も期待出来ませんね…

「次は決勝戦です！！この勝負に勝った人が闘技場の番人に挑む権利があたえられます！！」

『相手は…っ！？』

女性…白い服に水色の髪…

武器は槍ですか…

しかし、関羽さんに似た闘気を感じる…

間違い無い！！

彼女は…強い、出来る！！

星SIDE

風や稟に誘われ来た闘技場…だが私を満足させてくれる相手がいない…これでは番人にも期待がもてないな…まあ優勝賞金だけでも頂きますかな。

だが私の直感が感じた…

強者の気配つわものを感じた…

その直感を信じて遂に決勝戦…そこにあの強者の気配を感じた人物がいた…

「決勝戦！！彪里対趙雲！！互いに準備は宜しいか！？」

星「勿論。」

『問題無いですよ。』

彼の声は若々しい青年のそれ…だがハッキリとしている口調だ…

「では決勝戦…始め!」

開戦同時に地を駆けた…

SIDE終了

始めと同時に趙雲が彪里に槍で突く。

ガキイン！！

だが彪里は余裕綽々に趙雲の攻撃を捌く…

『技術は中々…速さも上々…』

星「くっ！！言ってくれますな！！」

ビュッ！！

ビュッ！！

一般人には最早見えない速度の斬り合い…

星「ハイハイハイイ！！！！！！」

ガキイン！！

キイン！！

ギイイン！！

『まだ荒削りですが…将来が楽しみです。ね。』

星「おや？今の私の魅力では足りないですか？」

ガキイン！！

『そうです。ね…今のままじゃ…』

彪里が両剣を振り抜く…

ガキイイイン！！！！

星「なっ！？」

『満足出来ませんね。』

ガチャン！！

趙雲の槍が吹っ飛ばされた…

星「これでは試合が出来ませぬ…私の負けですな。」

「勝者彪里！……！」

「さあ今から挑戦者彪里対闘技場の番人との特別試合です……！」

『……あれが番人……』

大柄の男の武器は大剣……

番人「軽くひねってやるよ……！」

「この番人、昔は賊を一人で200人斬り倒した実績の持ち主!! 挑戦者はどれくらい持ちこたえられるかぁー!!!? それでは特別試合、始め!!!」

番人「こんな餓鬼がここまでくるとはな…最近の若い奴らは廃れた武しか持ち合わせていないのか?」

男はニヤニヤニヤけながら彪里に問いかける…

番人「まあ、てめえもここまで来たんだ。多少腕に覚えがある程度だろ?死ぬ前に降参しろよ?」

彪里はただ黙って聞いている…

番人「聞いてんのか餓鬼。それともびびったか？」

ここで彪里が口を開く…

『余り強い言葉を使わない方が良い。弱く見える。』

番人「てめっ!？」

ザンツ!!

『そして試合が既に始まっているのにぐらぐら話すのは三下のする事ですよ…って聴こえていませんか。』

ドシヤ…

「い…一撃ひつさあーっ！！番人が挑戦者に一撃で倒されました  
あああ！…！！コイツは一体何者だあああ！…！！？」

『そう聴かれたらこう答えるしかないですね…僕は彪里、ただの旅  
人です。』

こうして闘技場の番人は呆気なく彪里に倒されたのであった…

闘技場上層部…

「番人が負けただと!？」

「こうなれば…金だけ持ち出して逃げるか…」

「あの参加者…彪里と言ったな…いずれ潰してくれる。」

上層部の連中はそのまま逃げようとしたが…

星「ほう…つまり最初から賞金は払う気が無かったと？」

「っ貴様!?!?どうしてここに!?!？」

上層部の連中がいるのは闘技場の一番上の階…一般人は基本入って来ない場所である…

星「私は別に賞金さえ貰えば問題無かったが…賞金の持ち逃げをする輩がいるなら話は別ですなあ。」

チャキ…つと槍を構える星…

「クソ!!」

奴等も剣を構える。

星「(三人か…)私の実力は知っているだろう?怪我する前に止めておけ。」

「うるせえええええ!!!!!!」

星「仕方ない…」

ヒュッ

星は身体を低くし、連中に突っ込む…

バキッ!!

ガス!!

ガッ!!

槍の刃に当たらないように殴り付ける…

ドシヤ…

声を上げる間もなく倒れた…

星「さて、このまま役人に突きだすか…」

星が連中を縄で縛る…

『それは止めた方が良いでしょう、趙雲さん。』

後ろの扉から音も無く入って来た彪里

星「これは彪里殿、優勝おめでとうございます。番人も倒したよう  
で。」

『あれで番人と呼べるかどうかも疑問ですがね…それはともかくそ  
いつ等は役人とながっている可能性があります…僕に任せてもら  
えませんか？』

星「彪里殿に？ですが役人に突き出せないならどうするのですか？」

『僕の知り合いがある役人に娘が拐われたと聞いて役人に齒向かおうとしましたが…どうやらこの番人とつながっていたらしくてね…この上層部の連中もつながっている可能性が高いですからね…』

呂范の事である…

星「ふむ…ならばお任せしよう。」

『ありがとうございます。では僕はこいつらを連れていくので…その前に賞金を頂きますか。』

奴等が持っていた賞金袋を手に取り袋の半分位を自分の金布（昔の財布）と思って下さい）に入れた。

『残りは趙雲さんが貰って下さい。』

星「おや？私は貴方に負けた筈ですが？」

『では準優勝の賞金とでも思っ貰ってやって下さい。』

そう言っ強引に星に賞金袋を渡す。

星「中々強引ですな。」

『気にしないでくれるとありがたいですね。では趙雲さん』

星「星。」

』はい？』

星「私の事は星と呼んで下され彪里殿。」

』…真名ですか？』

星「貴方は強い武人です。真名を預けるには充分かと…。」

』…まあ受け取りましょう。ですが呼ぶかどうかは別です。』

愛紗…関羽にも同じ事を言っていた彪里…

星「つれないですなあ…まあ宜しいでしょう。」

『僕は今まで通り彪里と呼んで下さい。』

星「そうですね…では彪里殿、また会いましょう。」

『ええ…またの再会を楽しみにしてますよ。』

そう言って彪里は上層部の連中を引きずって行った…

星SIDE

私は風と稟が待っている観客席に戻った…

風「ほづほづ…それでは星ちゃんは彪里殿と密室で二人きりだったと。」

稟「星が密室で男性と二人っきり…ブツブツブツブツ…ブーッ！！  
！…」

風「はい、トントントンしますよー」

稟「フガフガ…」

星「お前達も飽きないな…」

二人とはなんやかんやで長い付き合いだ…

これから世が荒れる中…風と稟は軍師として、私はこの槍を預けるにふさわしい主をさがして…

しかし彪里殿は一体どうするのだろうか…

まあ彼ならば、あれだけの武があるんだ…

何処に就いても可笑しくはないだろう…

SIDE 終了

呂范「時に問題無かったみたいだな…」

『まあ上層部とその番人を捕まえてますからね…油断すると危ないですよ。』

番人と上層部の連中を馬車の荷台に乗せ、呂范の村に向かう…

呂范「これでやっと…亜莎…」

『…娘さんの名前ですか？』

呂范「ああ、今のは真名だが…呂蒙子明って言うんだ。これが良  
く出来た娘でな？」

この後一刻程長話をされた…

親バカとはこういう事か…

山が遠くに見える場所にポツンと小さな壁に囲まれた村が見えた…

呂范「あれが俺達の村だ。」

『あれがですか…』

村に行くため、馬の速度を上げる。

『ここが…それにしても…』

彪里は周りを見渡しながら…

『人が少な過ぎる…それに女性が居ない？』

呂范「ああ…役人のせいさ…だが番人の居ない役人なんて狩られるだけの兎だ。娘を人質にした代償はデカイぜ？」

呂范は笑いながら答える…

『(やはり…この人は強いんじゃないか?)』

疑問に思ってしまう程の台詞だった…

## 登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介のみです。

## 登場人物紹介

諸葛均、字を一説では子魚と言う。

演義では劉備が三顧の礼の時に諸葛亮と最初勘違いした人。

史実、演義共に諸葛亮の同母弟。

一説では諸葛亮の息子とも言われている。  
演義では劉備に仕えていなかったらしい。

今作品の主人公。

性格は真面目で堅物。曲がった事が大嫌いな少年。見た目は青と水色の服を好んで着ており、基本はこの服。

髪はちよつと薄い青、目はキツとしている。ぶつちやけヒューバー  
ト。

原作開始（一刀があらわれる）時に、眼鏡をしているが眼鏡が無くても多少は見える。真名は彪里だが今作品においては諸葛均の名を隠し、彪里とだけ名乗っている。

身長 175

体重 60

年齢 15（原作開始時は17）

実は朱里の一つ下の年齢。

武器は両剣を使う（三國無双4の曹丕の武器、もしくはテイルズオブブレイセスのヒューバートの武器）。真ん中の柄を離せば双剣にもなる。いずれ銃も使わせたい。

イメージはブレイセスのヒューバートが少し強くなった位。（CVも同じヒューバート。）

呂范

オリジナルキャラクター。今回は呂蒙の父親の設定。

身長182

体重72

年齢30

性格は抜けている時もあるが、自分の大切なものは全て護ろうと考える人。髪は銀髪で何気に若い。14歳で子持ちになった人。

イメージは戦国無双3の加藤清正。（CVも加藤清正と同じ人）



## 第四話（前書き）

やっと書き終わりました。

## 第四話

闘技場の番人と上層部を引き摺りながら役人の屋敷へと向かう彪里と呂范。

村の人達があまり居ないから好奇心な目で見られなくてすんでいたが…

『やはり僕の格好が可笑しいのでしょうか？』

呂范「いや、少なからず引き摺っているこいつ等も原因かと思うがな…まあ気にするなよ。…っと、着いたぜ。」

呂范が言つと、目の前には結構でかい屋敷があった。

入口にも見張りが何人かいる…

『どうしますか？娘さんの救出を先にしますか？』

呂范「まあ個人的にはそうしたいが…彪里さんだったらどうするっ」

彪里は少し悩んで…

『なら娘さんを救出しましょう。人質に取られると厄介ですからね、こいつ等は…まあ邪魔にならない所に置いときますか。』

連れて来た闘技場の連中をその辺に転がす。

『所で呂范さん、貴方は戦えるのですか？』

呂范「まあ、いつもと武器が違うから不安だが…その辺の雑魚に遅れは取らねえさ。」

『なら大丈夫ですね…では行きますよ！！』

二人は正面から突撃した…

亜莎  
SIDE

ここにきて既に十日は経ちました…

「この役人の理不尽な税のせいで私が人質にされて…  
父上にまで心配をかけるハメになりました。」

「この生活も見張りに見張られながらの生活です…」

もう…

「私に自由は無いのかな…?」

バンツ!!

突然扉が乱暴に開かれました

「大変だ!! 侵入者が入って来たぞ!!? お前も撃退に加われ!!」

「何だと！？だがコイツの見張りはどうする！？」

「問題無い、扉には鍵を付けておく！！行くぞ！！」

「ああ！！」

だだだだ！！

見張りの人が居なくなりました…

それにしても侵入者って…まさか父上っ！？

彪里SIDE

呂范「オラアアア！！！！！」

ドカアアアアン！！！！！！

「ギヤアアアア！！！！？」

今、呂范さんが敵を瞬殺しています…

棍棒で…



ドガシヤアアア！！！

呂范さんが扉を有無を問わずに破壊…

『って有無言わず破壊してはダメでしょう！？中に人がいたらどうするんですか！？』

呂范「あ、やべ…その事完璧に忘れてた。」

『貴方の娘さんが捕まってるのに呑気な事言ってる場合ですか！？』

呂范「亜沙なら問題ねえさ、強いから。」

『そ、そうですね…』

その壊れた扉の中に進む。

『「ここに見張りは…いましたか。」』

ただしつぶれているが…

呂范「ふっ、計算通り…」

『嘘つかないで下さい！さっき素で忘れて居ましたよね！？』

呂范「終わり良ければそれで良し！…！」

『終わってもなければ良くもありませんよ!?!?』

呂范「明日は明日の風が吹く。」

『何を未来に夢をみているんですか!?!? 現実を見なさい!?!』

ガタツ!!

呂范『「誰だ!?!?」<sup>です</sup>』

亜莎「ち、父上!?!?」

そこには片目だけ眼鏡をかけ、赤い服に裾のでかい上着を着ている少女がいた…

呂范「亜莎…ここにいたんだな！感動の再会といきたいが、先に豚の処理を終わらせてからだな。」

亜莎「はい、あの…貴方は？」

『僕は彪里、ただの旅人です。今は成り行きで呂范さんと貴女の救出と悪徳役人を潰す手伝いをしています。』

呂范「そう言う訳だ、亜莎…先に出てな。後は俺達がやる。」

『まあ、確かに。ここからは女性にはキツイ場面でしょうから…』

亜莎「…はい、わかりました。」

そう言つて亜莎を外に避難させる彪里

呂范「結局この兵士もこの馬鹿に使われてただけか…」

『無理矢理つて感じでしたからね…まあこの先にそのゴミがいる訳ですか。』

彪里と呂范の見た先には大きな扉があつた…

呂范「では早速…」

Bannon!!

扉を蹴破る呂范…

『普通に入れないんですか…？』

呂范「奴さんがいるのに礼儀正しく入る必要はねえよ。」

『はあ。(何か口調が違う…)』

役人「なっ！？貴様等何者じゃ！？」

扉の先には脂ぎった体で椅子にふんぞり返っている者がいた…

呂范「俺の顔を覚えてないのか？俺の可愛い娘を拐った悪徳役人さんよ…」

役人「貴様呂范か！？わしにこんな事してただで済むと思っているのか！！？」

役人は焦りながらも呂范に脅しを入れる…

呂范「てめえは村人を苦しめてただで済むと思ってんのか？」

呂范は怒りを表している…

役人「村人はわしのために尽くせば良いのじゃ！！食料！！金！！女！！全てわしの物じゃああ！！！！！！」

『世の中本当に腐ったものですね…こんな役人がいるから賊が出る…その賊を役人が狩る…ただの悪循環。ならば…』

呂范「その根本を叩けば問題無い訳だな…覚悟しやがれ!!」

役人「貴様等にわしを殺せるかあああ!!?!?!?」

ガキイイイン!!!!

役人と呂范が殺り合う…

役人は剣、呂范は棍棒…

だが…

呂范「オラアアア!!」

バキッ!!!

役人の右肩に重い一撃が入った…

役人「ぐうう!? 貴様!!」

『呂范さんだけが敵じゃないですよ?』

ザクッ!!

役人「グギヤ!!?」

彪里の両剣が役人に襲いかかる。

呂范「身体の脂肪が邪魔してなかなか決定打になりにくいな……」

『ならば斬り続けるのみ……!!』

ズバツ!!

ズバツ!!

ズバツ!!!

役人「ギヤアアア!!!」

ドシャ

役人が膝を付いた

呂范「てめえはやり過ぎた……ここで……」

ブンッ!!

呂范が棍棒を降り下ろす

呂范「くたばりな……!!」

ガツン！！！！

役人の頭に棍棒がブチ当たった：

グシヤ

ドシヤ…

『これで…終わりですかね。』

呂范「ああ。彪里殿、アンタには感謝している。出来れば礼をした  
い。」

『礼は要りませんが…あの役人の不正、番人や闘技場の上層部の連中をここの領主に引き取って貰いたいのですが…』

呂范「領主と言うと…孫堅様か、わかった。任せてくれ。それと彪里殿はこれから何を？」

『僕はこれから闘技場に行つて事態の收拾とこれからの事を決めたいと思います。』

呂范「そうか…ならいつでも俺を頼ってくれ。礼らしい礼が出来ないいな。」

『わかりました。気が向いたらまた来ます。では。』

呂范の村で役人を裁いた彪里…

ひとまず闘技場に向かう彼に衝撃が待ち受けていた…

彪里SIDE

『僕が…番人？』

闘技場に付いていきなり言われた一言…新しい番人になってくれ。

「あんた程の実力者なら問題無いさ。」

『いや、僕にも都合がありますし…』

「闘技場を救ってくれた救世主が番人…良い話じゃないか!!」

駄目だこの人…話を聞いてない。

「なあ頼むよ。」



.

## 第五話

闘技場の番人を引き受けた彪里…

だが彼はまだこの大陸を旅しなかった…故にあの返答だったのだ。

その後闘技場を後にした彪里は洛陽へと向かう。

その洛陽付近では賊が増え、民衆の不安を扇いでいた…

その問題を片付けるべく董卓が動いた。

董卓は呂布、張遼を討伐隊として派遣した…

だが、その討伐隊は7000…対する賊は5万を超える。

斥候の報告では5000…偽の情報を掴まされたのだ…

そして数の暴力の前にもならない董卓軍は、一度洛陽に戻り形勢を立て直すしか無い。

だが、目の前には賊の大軍…呂布こと恋が一人で殿を務めると言い、それを無理矢理通した恋…

董卓軍は洛陽に戻り、形勢を立て直している…

呂布は一人で賊を食い止めている…

そのより離れた場に一人の男…彪里の姿があつたのだ

『女性が一人であるの大軍を…多勢に無勢、ですが賊は見逃せませぬね。ならば僕がやる事は一つ、助太刀ですわね!!』

その圧倒的に不利な状況に旅人は赴く…

恋SIDE

「ぐわぁ！…！」

「馬鹿野郎！！困んで遠巻きに殺れ！！！！」

「じつじつ等…」

「弱い…」

「恋「フッ」…」

ブオン！！！！

ザシユ！！

戟で敵を斬り倒す…

恋「…多い」

「へっ！！5万を一人で相手するには無理だって事だよ！！！！」

恋「嫌い」

ザシユ！！

SIDE終了

彪里SIDE

凄いですね…一人であの敵を…

しかし、やはり体力が持ちませんか…

動きが鈍くなってますね。

「貰ったあああ…!!」

っ不味い！？

間に合うか！？

SIDE終了

「貰ったあああ！！！！」

恋はこれから来る痛みに目を瞑る…

ザシュ！！

ギヤアアアア!!!

恋「……………」

目を開くと一人の青年が立っていた…

「てめえ何者だ!!!?」

『僕は彪里…ただの旅人です。義により、貴女に加勢します。』

恋「…ありがとう…背中、任せた…」

『では…』

断罪を始めます』

彪里の加勢により、呂布は賊5万の討伐に成功した…

後から来た董卓軍の援軍も驚愕していた

張遼と呂布は彪里を洛陽に招待し、董卓との謁見が行われた。

月「貴方が恋さんに協力してくれた彪里さんですか？」

『はっ！！』

詠「あの賊には対処出来なくて困っていたの。助かったわ。それで恩賞は何がいいかしら？」

『恩賞などいりませんよ…僕は旅人です。気の向くままに旅をしているだけですよ。』

月「しかし…」

『それより…「鬼神呂布」や「神速の張遼」がいる軍が賊ごときに苦戦するのが気になりますか?』

ピクッ

詠が少し反応する…

詠「へえ〜…あの二人もうそんなに有名なんだ。」

『ええ有名ですね…では何故?』

詠「上からの指示で5000程度の賊だから7000もいれば充分だろって事よ…つまり上の失策ね。」

『ふむ…やはりこの国は腐りきってますね…』

詠「全くよ。自分の欲しか考えれない肥えた豚ばかり。」

詠は溜め息をしながら答え…

詠「まあアンタには関係無いけどね…恩賞の事だけどやっぱり路銀だけでも受け取って。じゃないと月の風評が悪くなっちゃっし…」

彪里は少し考え…

『……………わかりました。相手の想いを拒むのも失礼ですからね。』

詠は兵士に路銀を持たせ彪里に受け渡す。

『ちて…ならば腐りきったゴミを片付けないといけません…ね！…！』

ビュン！！

「「「「！！！！？」」「」」

彪里は自分の両剣を天井に投げる

ドスッ！！

「ぐわぁ！！！！？」

ドシヤ！！！！

天井から黒子が落ちてきた…

詠「これは…！！？」

張遼、呂布が董卓と賈馱の周りに固まり警戒する…

黒子「ぐうう！？…貴様、気付いて…」

『ええ、あんなに視線を感じたら嫌でも気付きます。あなたは雇われた隠密ですね？雇い主は…十常侍。狙いは董卓殿の誘拐もしくは暗殺…と言ったところでしょうか？』

黒子「貴様…何故そこまで…！！」

『おや？やはりそうでしたか。カマかけただけなんですけどね。』

黒子「なっ！？…ぐうううう！！！！！！」

黒子はかなり悔しがっているようだ…

詠「そいつは後でゆっくり話を聞かせて貰うわ…拷問でね。」

賈馱が兵士に指示し、黒子を連行した…

『では、僕はそろそろ行かせて貰いますよ？他にも旅したいところがありますからね』

詠「そう…ねえあなた、月に仕えてみない？勿論旅が終わってからでも良いから…」

ここにいる将達も賛同している…

だが…

『申し訳ありませんが僕は誰かに仕える気はありません。もっとも、今は旅の途中だから論外ですがね。』

詠「そう…残念だね。」

そう答え彪里は洛陽を後にした…

## 第六話

洛陽を出た彪里…

だが

『じじは一体…』

山の中で遭難していた

簡単に説明すると洛陽を出た後、山の道に沿って進んでいた彪里だが定番の山賊に絡まれて戦闘を行った。

その時に逃げた賊を追って来たまでは良かったが…

『やってしまいましたか…』

今更自分の行動に後悔する少年（15歳）

『うん？』

ガサガサ…

彪里は草木を退け、奥に進むと…

『つわぁ…』

大きな滝があった…

『しかし何故滝が？まあこの滝から下流に沿って行けば山から出られるでしょう。』

その時…

《……ッ……》

『っ！？誰がいるのか！？』

何かが聞こえた…

『今のは…』

《じっ……す…》

『…滝？』

彪里が滝に近付く。

『なっ！？滝の後ろに洞窟！！？』

《じっち…す…》

さっきよりはっきり聞こえた…

『行くしかない…か…好奇心には勝てないものですね…』

彪里は洞窟に入っ行って行った…

洞窟に入って暫く奥に進んだ彪里…

『これは…石盤？』

洞窟の奥には石盤みたいな物があった…

『随分と古い…これは文字か？』

書いてある文字は読めない彪里…

と言つより見たことが無い文字だった

《やっと来てくれましたか。》

彪里は素早く武器を構え後ろを向く。

『なっ！？貴方は！？』

その声の正体は…

『僕にそっくり…いや同じ気を感じる…？』

水色の髪に自分と似た服…だけど何が違う服を着ていた

《僕はヒューバート。貴方が来るのを待っていました。》

『貴方は一体…』

《僕は貴方の前世…貴方の忘れられた力を戻す為にここにとどまっている記憶みたいな物です。》

『前世？忘れられた力？記憶？何なんですか！！いったい…！！？』

ガキーン！！！！

ヒューバートが彪里に向かって剣を降り下ろした。

《時間がありません。貴方には僕の…前世の力を思い出して貰います！！》

『くっ!! 一体…何なんだって言うんだ!!』

ガキイイン!!!

《虎牙破斬!!》

『なっ!?!』

ザシュ!!ザシュ!!

上下に切り上げ切り下ろす技

《かわしましたか…ならば!!アクアバレット!!》

『なっ!?! 剣が!!』

ヒューバートの剣が双銃に代わり…

バシユン！！

『ぐう！？』

避けれる訳が無く直撃した…

『何だ…一体？』

《考える暇なんてあるんですか？》

『なっ！？』

彪里の上から声がかけれ、上を向く。

《Rサンダーボルト！！！》

ガガガガガ！！

半球体の電流に囲まれて感電した…

『ぐあああ！！？…ぐっ、ツハア…ハア…』

ザッ

彪里が片膝を地面に付ける

『くっ！！…？』

《…覚悟を決める!!》

ザンッ!!

ヒューバートが両剣を地面に叩き付けると…

『なっ!?!』

それと同時に彪里の身体が空中に浮いた…

《派手に踊れ!!》

ズガガガガガガガガガガガガガガ!!!!!!

双銃の無数の弾が彪里を襲う

《アンスタンヴァルス！！！！！！！！》

ガシヤアアアン！！

ガラスが割れる音と同時に倒れる彪里…

『ガアアアア！！！！？ガフツ、ゴ…ゴボオ！！』

身体中銃弾を受けた彪里は血を吐きながら痛みを耐える

《驚きましたね…この技をくらって立ち上がりますか…だが終わらせてやる！！》

ヒューバートは彪里に突っ込む

ドシユ

ヒューバートの両剣が彪里の身体を貫通する…

『ゴフッ…』

ガシッ

彪里はそのままヒューバートの腕を掴む

《なっ！？まだ動けるのか！？》

『成る程…貴方の技を見ていて何と無く…思い出してきましたよ。』

《（良く見たら脇腹にカスっただけ…この距離は不味い！？）》

ヒューバートが冷や汗を流す中、彪里は冷静になる

『この距離なら…いけます!』

そう言い両剣を回しながらヒューバートに斬りつけていく…

途中で両剣を二つに離し、双剣にして連続で斬りつけている

『全力で!…いかせてもらおう!』

数十回程斬りつけて…左の手に持つ双剣の片割れをヒューバートに突き刺し…

『こいつも!!持っていけッ!!』

彪里の右手が光るのをヒューバートは見逃さなかった…

彪里の右手に持っていた双剣の片割れが銃になっていた。



『ハア…ハア…やった…やった…のか？』

砂煙が薄くなり…

《六割は…思い出したようですね。》

掠り傷一つ無いヒューバートが立っていた…

『そんな！？傷一つ無いなんて！？』

《僕自身は幽体みたいな物ですから傷は付かないですよ。》

『っ！？だったら幽体すら消し飛ばす威力で…！！』

《いえ、もう必要無いです。忘れましたか？僕は貴方に力を思い出

して貰うだけ…故にこれ以上は闘う必要は無いんですよ。《

『……………』

《まあさっき言った通り、力を思い出してきましたから後は経験を積むだけで思い出すでしょう。》

『…そうですね。』

《？何か？》

『いや、何でも。では僕はそろそろ帰らせて貰います。』

彪里が身支度を終え…

『では僕はこれで。』

《…貴方には辛い現実や高い壁が待ち受けているかも知れません…》

『…』

《ですが…！仮にも前世が僕だったんですから諦めるとかそう言うのは無しですよ。少なくとも僕はそうでした。》

ヒューバートはメガネをつけ直しながら答える

『この能力はまだ完全に覚醒した訳じゃないんですね？』

《そうですね。あとは実践あるのみ…！それとここにはまだ多数の石盤があるので、むやみやたら触らないように。》

ヒューバートが指を差しながら答える。

《では頑張つて下さい。》

キイイイイーン…

目映い光が彪里を包む…

ドザマアアアアア…！…！

滝が流れる場所に彪里は倒れていた…

『…夢みたいな展開は辞めて欲しいですが…まあ良いでしょう。』

彪里は気を取り直して下流に向かうのであった。

## 第七話

あの滝の出来事から5日程移動して…

村人「よお兄ちゃん。旅人かい？何にも無い村だがゆっくりしてけよ？」

『お気遣いありがとうございます。』

村人の言う何も無い村に辿りついた

『あ、宿泊出来る場所を知りたいのですが…』

振り向きながら村人に尋ねるが

ヒュウウゝ

風の吹く音

『…………え？』

既に居なかった

その後他の村人に宿泊先を聞こうと村をブラついていたら…

??? 「んしょ、んしょ」

何やら大きい藁が積み車に乗って動いていた…

グラッ…

藁が急にぐらつき…

??? 「へっ?」

『なっ!?!?』

『つまりこの藁を家まで運んでいて少し疲れて止まったら藁が崩れてきたと…そう言う事ですか？』

??? 「はい…あの…大丈夫ですか？」

彪里は藁の残骸を頭に被つたまま女性に話を聞いていた

『まあ僕も油断してましたから仕方無いですが…』

彪里は自分の後ろを見て…

『この惨状をどうにかしなければ…』

崩れた藁によってそこから一面に藁が散らばっていた…

「????」うう…折角纏めていたのにいゝ(泣)」

片付け開始から20分後…

そして

「????」終わったあゝ。さあ、お兄さん。私の家に行こつよ」

『いや、何で僕が貴女の家に行かなければいけないんですか!?!』

「????」ええ!?!ついて来ないの!?!」

『何で付いて来ない方に不思議がるんですか!?!付いて行く理由がないでしょう!?!』

「????」付いて来ないとお礼出来ないじゃないですかゝ。」

『別にお礼目的で手伝った訳じゃないですよ!?!』

桃香「だったら良いじゃないですか あ、名前言ってなかったですね。私は劉備、字を玄德。真名は桃香だよ」

『この際付いて行く行かないは置いておくとして、いきなり何真名を教えてるんですか!?!』

桃香の天然に突っ込む彪里

桃香「え?だって良い人だし…」

『良い人でも会って間もない人に真名を教えるのは非常識です!?!』

桃香「えっ!?!?そうなの!?!私結構教えてたけど…」

『誰か彼女に常識を教えてください!!!』

結局付いて行く事になった彪里だが…

『成る程：藁で草履や筵むしろなどを作っていた訳ですか。』

桃香「笠もあるよ」

『いや、まあそれは良いんですが…』

桃香「あつ、そうか。お礼忘れてたもんね？」

『いやだからお礼的じゃないと…』

桃香「何か困っている事でもある？金は少しなら出せるけど…」

話を聞かない桃香に彪里は溜め息を吐きながら答えた…

『ならこの村の宿屋を教えてください。それで結構ですよ。』

彪里は桃香にそう答えた…が

桃香「えっと…ごめんなさい。この村に宿屋は無いの。」

答えは非情だった

桃香「だから私の家に泊まっても大丈夫だからー!!」

『離して下さい!!今すぐ次の村か町までいかねばならないのです  
!..!』

桃香の家の入り口で彪里腕を取って必死に止めている桃香…

桃香「もうすぐ日が暮れるから危ないよ！！私の家ならまだ寢床はあるからー！！！！」

うぎぎぎいーっと喚きながら彪里を必死に止める桃香に彪里は…

『女性の家に男である僕が泊まる訳にもいかないでしょうー！！？』

桃香「大丈夫だって！！彪里さんは良い人だから！！」

『万が一間違いがあったらどうするんですか！？？』

桃香「じゃあ彪里さんは間違いがあるんですか！？？」

『万が一と言ったでしょ!?!』

桃香「なら大丈夫だよ!?!間違いは無いんだから!?!」

『大丈夫だとしてもそんな噂が立つだけで大丈夫じゃないでしょう!?!』

桃香「私は気にしないもん!?!」

『気にして下さいよ!?!!?!?』

一刻の言い争いの結果、結局桃香の家に宿泊する事になった。

桃香「はあ…疲れた」

『全くです…まあ決まったからには従いますがね。』

桃香「えへへ…そういえば彪里さんは何で旅をしているんですか？」

居間でくつろいでいる時、桃香がふと彪里に聞いた…

『そうですね…この腐った世の世直し、っとでも言っておきましょうか。』

桃香「ふえ〜、彪里さんって強いんだ」

『いえ、僕はまだ弱い…強ければ…』

桃香「？」

「（僕が強ければ両親は死ななかったかもしれない…いや、たられ  
ばは止めよう）いえ、何でもありません。僕はやはり今の世の中が  
あまりにも酷すぎる故に立ち上がった。まあ旅人では限りはありま  
すが、それでも守れる人もいます。」

桃香「そっか…彪里さんもこの世の中に憂いて…私もいつかはこの  
世の中の為に立ち上がるつもりです！弱い人が強い人の糧になり  
生き残る世の中なんて間違っているから…」

桃香は表情を暗くしながらも瞳には決意の光が灯っていた

「…劉備さん。貴女は…この世の戦乱を憂い立ち上がるつもりです  
か？」

桃香「はい…私は戦を止める力も知恵もありません。でもこの気持  
ちだけは誰にも負けない自信があります…！」

「（人を集める魅力…彼女にはそれがある…が…）ですが、それを  
行う事により死ぬ人間は増えます。貴女にそんな気が無くても…貴  
女がこれから起こす闘いによって死ぬ…この矛盾はどうするんです

か？』

我ながら意地の悪い質問をしたものだ、彪里はそう思いながら桃香の答えを待つ

桃香「たしかに矛盾します…誰も死なない世の中を…戦の無い世の中を作るうとして、自分で人を殺す戦を始めようとしています…でも私は…！」

桃香が答えようとした時、外が騒がしくなってきた…

ワーワー…！

桃香「なっ、何！？」

『外に出てみましょう。』

彪里と桃香は家からでる…

そこは…

桃香「そんな…!?!」

『これは!?!』

賊が村を襲っていた…

『クツ!!劉備さんは此処に隠れていて下さい!!…!』

桃香「わ、私も闘う!!」

桃香が腰の剣を抜く

『なっ!?!無茶です!!貴女は人を殺した事も無ければ闘いも慣れていない筈!!』

桃香「確かに私は闘う事もなかったし人を殺した事も無いよ……」

桃香の剣を持つ手と腕が震えている……

桃香「どんなに矛盾しても……どんなに無茶でも……目の前の人も救え無くてこの世の中は救えないよ!!?」

『っ!?!? (揺らぎの無い決意した目……これなら……) 分かりました、僕から離れないで下さいよ。』

桃香「っ!?!?!うん!?!」

村の中央では賊が暴れていた

賊「オラオラア！！食料と金目の物を奪い取れえ！！！！！！」

頭「女、子供とて容赦するな！！生き残りは残すな！！」

賊「！！へい！！！！」

賊は30人程で頭が一人だけ馬に乗っている…

ズバア！！

賊「ぎゃあああ！！！！？」

『今すぐ奪った物を置いてここから出ていけ！！！！！！』

彪里と桃香が賊の前に現れる…

一人の賊を斬るといっておまけつきで…

頭「誰だてめえ？お前え等やっちまえ！！！」

賊「おおおお！！！！！」

賊「たった二人でどうしようってんだ！！！」

ザシユ！！！！

『邪魔です！！』

賊「こっちの女もやっちまえ！！！」

桃香「きゃっ！？」

ガキイン！！！！

賊の攻撃を受け止める桃香…

鏢競り合い状態で桃香が押されていたが…

『水弾！！！！』

ダンッ！！ダンッ！！

桃香の方の賊を銃で撃つた彪里…

『油断しないで下さい。』

桃香「しっしめんなさい」

頭「何やってやがる！！早くやっちまえ！！！！」

頭が手下の賊にそう言うが…

ドシャアア…

周りの賊10人程が倒れた

頭「なっ!?!」

『斬られた事にすら気付けないとは…!』

彪里が頭の後ろにいた…

頭「クソが!?!?!」

ガキイイイン!!

頭の斧が彪里に叩き付けるが彪里は軽く受け止め…

『はっ!?!?!?!?!』

ザシュ!!!!

頭の首をはねた…

『大した事なかったですね…』

彪里は両剣に付いた血を剣を振り、落とす…

彪里が頭を討ち取った時、桃香は賊と闘っていた…

賊「このアマアアア…!!」

ガキイイイン!!

桃香「あうー!!」

ドサッ!!

賊の攻撃に耐えきれず倒れてしまう桃香

賊「へっへっへっ…手間取らせやがって…死ねええええ!!!!」

賊の剣は倒れている桃香に真っ直ぐ向かう…

ガキイイイン!!!

しかし桃香は持っていた剣で防ぐ。

賊「このっ!!!?」

ぐぐぐ…

桃香「うう…（このままじゃ…殺されちゃう…!）」

カチャ…

倒れている桃香の左脇らへんには死んだ賊の剣が落ちていた…

桃香「つ!?!?（これなら!?!）」

考えてから行動するのが速かった…

左手でその剣を掴み…

桃香「やああああ!?!?!?!」

ドシユ…

その剣で桃香の上にいた賊を刺した…

賊「ゴフウ…!!」

びちゃあ!!

ドサッ…

賊から出た血が桃香を濡らす…

桃香「私……人を……」

ドクンッ!!

身体の中から心臓の跳ねる音が聞こえ…

桃香「う…うげええええ！！！！うぶっ！！…うえ…」

口から嘔吐物を吐き出した

無理も無い、人を初めて殺したのだから…

『大丈夫ですか！？』

彪里が桃香に駆け寄る

周りの状況からすると賊は全て倒したようだ…

桃香「私…人を…人を…」

『辛いでしょうが、これが現実です。貴女が世を憂い、旗揚げする  
ならこれ以上の血が流れます。』

背中を擦りながら桃香に言う…

桃香「私…何も覚悟…出来て無かったんだね…口で偉そうな事言うて…実際は全然…」

『…死んだ人の一生を…責任を…貴女は背負わなければいけません。その覚悟はありますか？』

桃香「……………」

桃香は黙ってしまった…

『ですが貴女は逃げてはいけません。一生背負い続けなければいけません。それが責任です。』

桃香「せき…にん？」

『はい…貴女は人の死を今日目の前で体験しました。その事を当たり前だと感じてはいけません。貴女の矛盾ははっきり解決しません  
が人の死を見つめれた筈です。後は貴女次第です。』

桃香「…私は………」

甘い幻想でも…矛盾しても…立ち止まりません！！人の死を…私が  
被った血を…忘れません！！！！」

『ならば大丈夫です。』

決して、その事を忘れてはいけませんよ？』



『やはり悪夢を見ましたか…』

彪里が現れた

桃香「彪里さん…あの…」

『僕もそうでした…初めて人を殺めた時にその夢を見ました。』

桃香「彪里さんも？」

『まあ僕は今も見ますけど…でも忘れてはいけませんから。』

彪里は夢げに笑う

桃香「（彪里さん…カッコイイなあ／＼）」

『では僕はもう一眠りといきますか。』

桃香「あの…彪里さん…」

部屋に戻ろうとする彪里を止める桃香…

『何ですか？』

桃香「あの…その…／／／また怖い夢見ちゃうかも知れないから…  
／／／一緒に寝てくれませんか？／／／」

真っ赤になりながら伝える桃香…

『…ハア…変な噂が立っても知りませんからね。』

桃香「っ！？ありがとう！！／／／／／」

根は優しい彪里だから今回の桃香はほおっておけなかった

桃香は幸せそうな寝顔で眠りついた…

第八話（前書き）

短いです

## 第八話

桃香と寝た（決して性的な意味では無い　by 彪里）翌日

村の出入口には二人の男女、桃香と彪里がいた…

『一日お世話になりました。』

桃香「いえいえ、こっちのほうがお世話になっちゃいましたし」

そこで桃香は思考を昨日の事に回す…

彪里さんにぶつかって…

藁と一緒に集めて貰って…

村を襲った賊を退治して…

夜眠れなくて一緒に寝て貰って…って!?

ボンツ／／／／／

桃香「うう／／／（思い出したら恥ずかしいよ／／私今絶対顔赤いよ／／／／／）」

思考に耽り過ぎて顔が真っ赤になる桃香

『どっしました？急に顔真っ赤にして。昨日夜寒かった…／／／／』

彪里も思い出して顔真っ赤。

『ゴホン／／では僕はそろそろ行きます。』

桃香「道中気をつけて下さいね？」

『ええ…劉備さんも…』

桃香「むうー…桃香です!」

『だから真名を預けるのは早すぎますよ』

桃香「早くないですよ!一夜を共にしたんですから問題無いです

」

『ぶっ!?!いきなり何を口走っているんですか!?!』

桃香「事実じゃないですか。」

『淡々と言わないで下さい!?!確かにそうですけど泊まっただけでしょう!?!しかもほぼ強制的に!?!』

桃香「でも一緒のお布団で寝たから真名を預かるには足りるか」と

『誤解を招く言い方は止めて下さい!?!さっきから男性からの視線が怖いんですから!?!』

主に村の若者（桃香に好意を寄せている者達）

桃香「じゃあ真名で呼んで下さい」

『じゃあって何ですかじゃあって!?!しかもこの状況楽しんでますよね!?!?!?確信犯ですよね!?!?』

桃香「大丈夫大丈夫」

『何がですか!?!?』

桃香「イケるイケる」

『更に何が!?!?!?』

この後、口論が一时间程長引いたらしい。

『では本当にいきます。』

桃香「うん…また、会えるよね？」

桃香の言葉に軽く驚く彪里…

『次会うのは戦場か…はたまた町や旅の途中故にか…もしかすると敵かも知れませんかし味方かも知れませんか。』

桃香「……………」

桃香は黙って彪里の言葉を聞く…

『貴女は心身共に強くなりなさい。決して挫けず立ち止まらない様に。』

桃香「は、はい…！」

『そして考えて悩んで…道を選びなさい。道を誤るような事が無い様に…ではまた会いましょう。劉備さん。』

桃香「最後まで頑固ですね…」

『次会った時に言いますよ…多分』

桃香「むう…次は絶対ですよ!!」

『分かりましたよ。』

彪里は桃香と別れ村を出た…

## 第九話（前書き）

L e t ' s P a r t y ! ! !

Y a i h a i ! ! のあの人が出ます

お気に入りなので…

## 第九話

桃香の村から出発して五日

此処は…

豫州

『名族袁紹が治めている州ですか。』

余り良い人柄じゃないのは噂で良く聞く

賊も多いと聞く…

『そう言えば…』



賊は青い鎧の男を見るとざわめき始めた

賊A「青い鎧…」

賊B「あいつ…まさか!？」

その男は三日月の兜を被り腰に六本の刀を帯びていた…

賊C「張コウだ…張コウが出たアアア!!!!!!」

張コウ「Let's Party!!!!」

張コウが刀を全て抜き、六刀の刀で賊を切り刻む…

兵A「こ、高順様アアア!!!!頭がまた一人で!？」

青い鎧の兵らしき人が叫ぶ

高順「また政宗様は無茶をして…てめえ等しっかり付いて来やがれ  
! ! ! ! !」

高順…左頬に一本の切傷がある強面の将ですか…

張コウ…真名が政宗って言っていましたね。

政宗「よう小十郎、遅かったな。」

小十郎「全く、あまり無茶をなされるな。」

小十郎…高順の真名ですかね？刀を二本…ですが一本しか使っていない？

予備か？

「やべえぞ…独眼竜に竜の右目が揃っちゃった…」

「逃げる…逃げるんだアアアア！！！！？」

一目散に逃げ出す賊…

政宗「おいおい、今からPartyが始まるつてのに逃げるのは無しだろ？まあ逃がさねえがな…豫州筆頭、独眼竜政宗…推して参る。」

そこからは圧倒的だった…

張コウの軍が賊を蹂躪したのだ…

一刻も経たずに賊は滅びた。

政宗「今回も楽な戦だったぜ。小十郎、勝鬨を上げる。」

小十郎「はっ、てめえ等！！俺達張コウ軍の勝ちだあ！！！！！！」

オオオオオオ！！！！

兵が雄叫びを上げる。

政宗「んで？さっきから傍観していたCooonな兄ちゃん。何の用だ？」

政宗が正面を向きながら言う

『…いつからお気付きで？』

政宗「あんたの頭を飛び越えた時から気付いていたさ、んであんたは俺になんの用だ？」

あの時から気付いていたんですか。

『人の頭上を飛び越える人がどのような人物か気になったただけですよ。』

政宗「doubt、嘘言ってんじゃないよ。アンタはもっと違う目的だ…だろ？」

『貴方には人の心を読む目でもあるんですか？まあ良いでしょう。』

一旦間をいれ…

『貴方を我が闘技場の戦士として勧誘したい。』

政宗「闘技場だあ？小十郎知ってるか？」

小十郎「許昌より南下の江夏にあります。今は新しい闘技場の管理者が現れたと聴き存じます。」

政宗「アンタがその管理者って訳か？だが俺は生憎弱い奴に興味はねえ…言ってる意味はわかるか？」

『つまり力を示せ……と……？』

政宗「俺に勝てたらその話乗ってやるよ！！ただし条件付きだがな  
！！小十郎！！手え出すなよ？俺とアイツのサシの勝負だ。」

小十郎「はっ」

『仕方ありませんね……ですが……』

良将が得られるならそれも良し。』

彪里はゆっくり両剣を構える

政宗「H A ! L e t ' s s h o w t i m e ! !」

政宗が刀を抜き彪里に斬りかかる

ガキイン!!!

鉄と鉄がぶつかり合い、火花を散らしながら鐔競り合う

政宗「D E A T H ! !」

政宗が右手に三本の刀を指で挟んで下手から斬りかかり…

『ぐっ!!! (刀三本を防ぐのは思いの外厳しいですね…)(』

政宗は下から上へと斬り上げそのまま空中に飛ぶ…

『っ！？飛んだ！！？』

政宗「FANG！！！！」

空中から再び刀三本が襲いかかる。

空中から落ちてくる勢いを利用して威力も高い技となる。

ギイイイン！！！！

『…ふう…』

政宗「俺の技食らって生き残る奴がいるのは久しぶりだな。OK！  
！アンタには俺の政宗を預けるぜ！！それが俺の誇りさ！！！！！！」

『いきなり他者の真名を授かる気にはなれませんが？』

政宗「信用出来ないか？命の取り合いで互いの事は良くわかりあえると思うぜ？」

『…まあ否定はしませんよ…』

政宗「HA！！まだまだpartyは始まったばかりだぜ！？さつさと全力のぶつかり合いといこうじゃねえか！！！」

なら…

僕の全力をみせますよ…

『派手に踊れ！！！！』

ザンッ！！

地面に剣を突き刺し政宗が宙に浮く…

政宗「なっ!?!」

ガガガガガガガガ!?!?!!

両銃で政宗を乱れ撃つ

『アンスタン・ヴァルス!?!!』

ズガアアアアア!?!!

政宗「ぐあああ!?!?!?ぐう…:HA!?!やるじゃねえか…:HELL  
DRAGON!?!」

蒼い雷が一直線に彪里に向かう

『何っ!?!?!?ぐううう!?!?!?!?!』

剣で防御体制をとるが…

『（なっ！？これは雷！？）』

剣を伝って電気が彪里を襲う

プスプス…

『これは…効きますね…』

雷で焦げている服をパツパツと払い剣を構える

政宗「良いねえ良いねえ！！上等だよ！！アンタ上等だよ！！！」

それから一刻ほど殺り合った結果…

キイイイイン！！！！

政宗「ぐあああああ！……！！！」

ドサア！！

政宗が剣と一緒に勢い良くブツ飛ばされた…

『ハア…ハア…これで…僕の勝ちですね。』

政宗「ああ…約束は守る…竜はアンタに従うぜ…」

そう言い政宗は気を失う。

小十郎「政宗様…全く、無茶を為される。」

『高順さん…ちょ…政宗さんを運んで貰えますか？』

小十郎「政宗様が真名を預けたなら俺も貴方に預けましょう。俺は小十郎、これより政宗様共々よろしくお頼み申す。それで何処にお

運びに？」

『僕の……いえ、僕達の拠点。闘技場です。』

## 第十話

政宗と小十郎を仲間した彪里は二人を闘技場に送り再び旅に出た

そして高名な孫堅がいる呉に向かい始めた彪里だったが…

『はっ…』

目の前には桃色の髪をした小麦色の女性が倒れていた…

『血…しかも切り傷が多い！！これは人間がやったのか！？』

余りにも鋭すぎる…

ガサガサ

草むらが揺れ、人影が一つ

黄祖「ソフフフ…孫堅さ〜ん、死ぬにはまだ早いですよ〜さあまだ私、黄祖の心臓は止まっていますよ？」

白い髪の何処か死神を思い浮かべる男が現れた…

黄祖…成る程劉表の配下の武将ですか

と言つより呉の王ですか…

「貴方は劉表配下の黄祖であつてますね？」

黄祖「おや？貴方は？」

「僕は彪里。ただの旅人です」

黄祖「ただの旅人…ですか…」

ヒュン…

ガキイン!!!

黄祖の両手の巨鎌が彪里に降り下ろされ…

それを彪里が両剣で受け止める

黄祖「ただの旅人はこの一撃で死んでいますよ？」

「旅人に刃を向ける貴方も大概ですがね」

両剣を振り抜き黄祖が間をあける

黄祖「貴方との殺し合いも良いですがそこにいる孫堅さんを殺さなければいけないので少し待って下さい。」

『無抵抗の人間が襲われるのを黙って見ている程、僕は薄情ではないのですよ。』

黄祖「ならば貴方が先に死になさい。」

黄祖は巨大な鎌で彪里に斬りかかる

キイイーン！！！

『それもゴメンです！！』

バン！！

バン！！

彪里は両銃で黄祖を撃つ

黄祖「おっと」

ヒラリ、と軽くかわす。

黄祖「ソフソフソフ…随分と奇妙な武器を…」

『それを初見でかわす貴方も奇妙ですがね…』

黄祖「さあ、まだ楽しい殺し合いは始まったばかりですよ…!」

黄祖が彪里に大鎌を降り下ろす

『残念ですがここまでです…水弾!』

ドソッ!…!

黄祖「おっと」

黄祖が弾撃を大鎌で防ぐ

バシユン！！

黄祖「これは…水？」

弾いた瞬間水が飛び散り霧みたいな靄ができる…

『これで、炎弾！！！！』

ドンッ！！

カツ！！



その後、孫堅軍は孫堅を失い、兵達の士気が低下し戦に敗北

弱体化した孫呉を袁術軍が取り込んだ…

孫堅の後を引き継いだ孫策は袁術の配下として今は牙を隠している…

一方彪里達は…

小十郎「彪里殿！？その姿は！？そして後ろの御仁は…？」

『小十郎さん、この人は孫堅、先ほどの戦にて重傷です！！医務室へ運んで下さい！！政宗さんは医者と呼べるだけ呼んでいて下さい…！』

政宗「OK、小十郎この怪我人は任せた」

小十郎「ハッ、では。」

『僕は自分の怪我を治療したら直ぐに向かいます!』

闘技場に孫堅を連れて行き、治療を開始した

## 第十一話

怪我した箇所を薬を塗りたくり包帯で乱暴に締め付けた

何か危機としたような感情で…

『痛っ…やはり慣れないですね…』

…訂正、慣れてなかったただけである

応急処置を終えた彪里は闘技場の中にある医務室へ向かった

『小十郎さん、政宗さん。』

政宗「おう、彪里か。医者なら問題無いぜ？」

小十郎「華佗と言う流れの医者が見つかりましたので問題無いかと  
…」

『そうですね…』

とりあえず、何が起こったのか、今から貴方達には話します』

彪里は黄祖との戦い、あの女性が孫堅である事を話した

政宗「黄祖…あの気持ち悪い奴か…魔王のおっさんの所の配下武将  
だろ？」

小十郎「劉表か…今はまだ目立つ行動はしていないようだが…」

『魔王？劉表は魔王と呼ばれているんですか？』

彪里が二人に聞くと二人は頷いた

政宗「俺も何度か戦ってみたがアイツは強え。だが魔王と呼ばれる  
由縁は奴の戦だな。」

小十郎「劉表軍の戦の後は敵兵と民の屍しかないそうです。」

その頃劉表軍は…

黄祖「信長公…孫堅軍は撤退したようです。」

劉表軍

総大将

劉表

真名

信長

信長「で、あるか……光秀え、孫堅の首はどうした？」

劉表軍

先攻部隊隊長

黄祖

真名

光秀

光秀「突然の闖入者に邪魔されました。」

信長「闖入者…とな？ならば今は国力を付けよ。濃と丸にも伝えよ  
…」

光秀「かしこまりました」

光秀は言つちや否や直ぐに部屋を出た

孫堅を保護して5日…

孫堅は目を醒ました後にここが何処かと聞いた後、僕達の名前と呉の様子を聞いていた

孫堅「そう…私はもう死んだ人間なのね…」

『貴方が戻るつもりなら止めはしません。ですが貴方が再び呉に戻る事によって劉表軍が動くかもしれませぬ』

孫堅「……………」

政宗「頭のアンタを失って仲間達は今、衰退しているだろうが…袁術の支配下にいた方が<sup>リスク</sup>riskも少ないだろうーな。」

政宗のセリフに目を瞑って考える孫堅

孫堅「ねえ、貴方闘技場の管理者よね？」

孫堅が彪里に確認するように聞く…

『そうですね？』

孫堅「なら私をここで雇わない？もしくはここで住ませて？」

『闘技場で住むはひとまず置いときましょう。雇う…ですか。』

因みにこの闘技場はかなりでかい為、周りに住宅地や、畑、川などもある。

闘技場の中もホテルみたいに宿泊可能な部屋が約1000部屋はある。

『孫堅さんは江東の虎と言われる程の武勇でしたね。まあ、良いでしょう。貴方を闘技場で雇います。ただし、貴方には偽名を使って

もらいますよ。』

孫堅「ほんと？ありがとうございます 偽名は後で考えると先に真名を教えるわね」

『どつしてこつも簡単に真名を…まあ名前を隠す意味でも良いでしょ』

桜蓮「なら私は桜蓮おうれん改めて宜しく」

軽い挨拶で終わらず桜蓮だった…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9376q/>

---

旅をする真面目君

2011年12月9日02時53分発行